

天才王子の赤字国家再生術2

～そうだ、売国しよう～

緊急重版オビ限定
書き下ろし短編

「絵画」



かいが
絵画

その日、ニニムはいつものように書類を抱えて執務室の扉を開いた。

「ウエイン、一旦仕事を切り上げて昼食に——」

と、そこまで言うてからニニムは口を止める。彼女の目には主君たるウエインと、もう一つ、見慣れないものの輪郭が浮かんでいた。

「……ウエイン、なにそれ」

「おお、ニニムか」

ウエインは振り向き、満面の笑みで言った。

「見ての通り——俺の描いた絵だ！」

見慣れないものの正体は一枚のキャンバスだった。言葉の通りウエインがその手に持つ絵筆で描いたものらしく、その表面には簡素な絵が描かれている。

「いやあふと隠居後に何をするか考えてな。何か商売でもやるのも楽しそうだけど、こういう絵を描いてみるのもいいかなって思ったらこう、創作意欲がな」

「……ちなみにこれ、何を描いたの？」

「ネコ」

ニニムは改めてキャンバスの絵を見た。

ネコ——とは似ても似つかぬ、奇怪な生物が描かれていた。

「どうだニニム、生き物なんて初めて描いたが、なかなか良い出来だと思わないか？」

「正直に感想を言っているの？」

「もちろん——ああいや、待て」

そこで一転、ウエインは真剣な顔つきになった。

「ニニム、今日の昼食のメニューはなんだ？」

「鴨肉かもじくを使ったものだけだ」

「そうか……」

ウエインは絵筆を机の上に置く。

「思うに、人は食事の時に頭を悩ませたりするべきじゃない。特に肉を食べる際には、何も考えずに味を楽しむべきだ……ニニムもそう思うだろう？」

「まあ、うん、そうね」

「なのでここで評価を耳にすることは大いなる問題といえる。だが、こうして作品を目にされておきながら評価を聞かないのも非常に気になる。なのでニニム！　ここは一つ、俺を喜ばせる感じで色々とオブラートに包んだ感想をカモン！」

「ゴミ」

「オブラートオオオオオオオオオオ！」

ウエインは叫んだ。

「言ったじゃん！ 俺配慮してくれて言ったじゃん！」

「十分配慮したつもりだけど」

「全然足りないよ！ 超絶配慮不足だよ！ これじゃ鴨肉食べるときに何が悪かったのか気になって味が解らなくなるだろ！ もっと控えめに言ってくれよ！」

「控えめに言って全部ゴミだから気にしなくていいわよ」

「オブラートオオオオオオオオオオ！」

ウエインは机に突つ伏した。

「あんまりだ、人の力作をそんな無情に切り捨てるなんて……俺が一体何をしたって言うんだ……」

「私が机の上に置いた書類がどうして手つかずなのか、それを答えてくれたら教えてあげてもいいのだけれど。ねえ、未来の芸術家さん」

ウエインはそつと目をそらした。

ニニムはその両頬を手で挟んで自分の方へ顔を向けさせた。

「待て、落ち着け、俺の話聞いてくれ」

「聞きましょう」

「……仕事サボってお絵かきするの、最高に楽しかった！」

「今すぐ書類を片付けるのと、自慢の作品が火種ひたねになるの、どっちがいい？」

「お仕事やりませす！」

かくしてウエインは昼食そつちのけで書類仕事にかかることとなる。

なおこの作品はその後ニニムの手によって大切に保存され、長きに渡って世に残ることとなるのだが——もちろん、今の二人には知り得ないことであつた。

